



昔話とその時代・序(中)

— グリム童話集について —

塩田平民話研究所 所長 稲垣 勇一

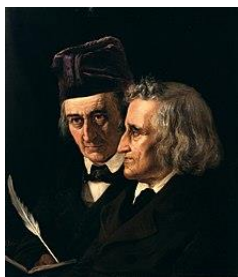
グリム兄弟(兄・ヤーコプ、弟・ヴィルヘルム)がグリム童話集『グリム兄弟によって集められた子どもと家庭のためのメルヒエン集』の第一版を世に出したのは、一八二二年十二月二〇日。売れ行きに自信のあった出版社が、なんとかクリスマスと種々工面したぎりぎりの出版であった。発行部数もわずかに九百部であったという。その後一八五七年の第七版まで、兄弟の名のもと主にヴェルヘルムによって手を加えられていく。話数は最初の八六話から版を重ねるたびに増加。一八五〇年の六版で二〇〇話に揃えられ、その数は最終七版にそのまま引き継がれる。その間四五年延々と修正・出版し続け、一八五九年ヴィルヘルムの死によって

終止符が打たれる。

この時代、一七八九年に始まるフランス革命の中から登場したナポレオンが皇帝にのぼりつめ、ヨーロッパ統一を目論んで各地に遠征。ロシア遠征の失敗やナポレオン軍に侵略されたことでナシヨナリズムに目覚めた諸民族の一角蜂起などで失脚。その後のウィーン体制の中で、ヨーロッパはフランス革命以前に逆戻りする。二五の君主国と四つの自由都市から成り立つドイツもその混乱の渦に当然巻き込まれる。そうした時代と国にグリム兄弟は生きた。小君主国いくつつかの図書館や大学にかかわり、兄はパリにも何年か滞在する。才能豊かな上に勤勉で謙虚な二人は、それぞれの場で学者として大きく確

かな成果を残していく。グリム童話集もまた否応なしに時代と国の在り様の中で生まれた兄弟の大きな業績の一つである。

ヤーコプは「民間伝承は書かれた記念日の説明のために使う」と書く。それを小澤俊夫さんは『グリム童話考』の中で「国家の歴史とか、書かれた記念碑的なものの説明のために使うこと」と解説してくれる。もちろん歴史・書かれた語られた記念碑的なものには、民衆の些細な日常の中の大きな意味も含まれるはずである。愛郷・愛国の想いの強かった兄弟にとって、ナポレオンのドイツ遠征とその後の数年は被侵略の直接体験であった。それが童話集作成の思いに無関係だったとは考えにくい。それを中心の一つに据えるのは危険だが、検証したい課題ではある。



第 24 便
2022.8.1
塩田平民話研究所
[事務局]
長野県小県郡
青木村大字当郷
2072 番地 2
☎0268-49-1231
shiodadaira.minwaken@outlook.jp



久しぶりにリアル「おやげねー」を聞いた。近ごろ、とんと耳にすることは少ない。80代篤農家の口から出る「おやげねー」は、ズシンと心に響く▼東信地方に伝わる「親気無え」は、同じく「かわいそう」を意味する「もーらしー」とも表現され、主に北信地方で使われてきた▼ムゴイ(酷い)↓モゴイ↓ムゴタラシ↓モゴタラシ↓モゴラシ↓モラシ



ーのように変化してきたのではないかと いわれる。彼岸に在る伯母の「もーらしねー」の声をしみじみと思いだす▼一方、先人たちの貴重な遺産でもあるデリケートな方言や、琴線に触れるような繊細な言葉遣いは、信州人だからといって誰もが気易く使える方言ではないだろう▼心の中に在る方言の神様にお伺いをたてて、「お前さんも、そろそろかな。丁寧に使うのだぞ」とか「まだまだ修行が足りん」などのお告げに従って、クリアした者がイナナの惨状ばかり目にしていて、心が荒れすぎ、果たして自分もいつかは使えるようになるのだろうかとか妄想ばかりが膨らんでいく。(きなこ)

山姥と鬼女伝説 比較考

論考

山姥と鬼婆はど
う違うのか。

塩田から丸子に
抜ける砂払峠に、
『小鍋だての湯』
の民話が残る。鬼
婆にさらわれた娘
が、鬼婆の留守中
に鍋物を作って食
べようとしたとこ
ろに鬼婆が帰って
きてしまい、慌て
て鍋物を隠そうと
井戸に放り込む。
すると、井戸が温
泉に変わり、その
効能で鬼婆の肌も
心も美しくなる
という話だ。



小鍋だての湯

また、別所温泉
の一角には、平維
茂（これもち）の塚
とされる古墳が残
る。維茂は、『鬼女
紅葉伝説』に登場

する。戸隠で無法を尽くす紅葉は、
会津の出。京に上り源経基の局とな
るが、御台所の病の原因が紅葉の呪
いであるとされ、戸隠に追放されて
鬼女となる。討伐に向かった維茂
は、紅葉の妖術
に苛まれるが、
北向観音に詣
で、十七日目に
夢枕に現れた老
僧から降魔の剣
を授かり、紅葉
の首をはねる。



平維茂將軍塚

『安達ヶ原の鬼婆』『宇治川の橋
姫』など、鬼女伝説は全国に広まっ
ている。

共通する特徴は、鬼女や鬼婆は、
元々は人間であることだ。『小鍋だ
ての湯』はややイレギュラーで鬼
婆から人間に戻るが、元々は人間
であったことが示唆される。

鬼（鬼女・鬼婆）は、現世（人間
界）と異界との間の境界におり、悲
しみ・怨念・怒り・呪いが渦巻く中、
祟りを身に纏う。境界に存在する
ため、現世との行き来も可能とな
る。

「鬼籍に入る」は、現世から離れ
たことを意味する。「鬼嫁」「鬼ババ
ア」など、日常生活の中に入り込ん
でいる鬼もいる。鬼の正体は、精神
活動の産物とみることもできよ
う。

山姥話はどうか。

地方により「山母」「山婆」「山姫」
「山女郎」とも呼ばれ、東海道・四
国・九州南部などには「山爺」や「山
童」と行動を共にする山姥もいる。

『北方山姥』『喰わず女房』『三枚
のお札』などでは、山姥は大人や子
どもをさらって食べる妖怪として
描かれる。窮地に陥った人間が機
転を利かせて九死に一生を得、山
姥をやっつける。

逆に、『糠福米福』『姥っ皮』など
では、継子いじめを受けるなど不
幸に見舞われた者に福を授ける山
姥が登場する。山姥の母性・温かみ
を感じさせる話だ。

こうした両義性をもつ山姥の原
型は、山間を生活の場とする人々
（山人）や、山の神に仕える巫女な
どが、妖怪化していったものと考
えられている。『遠野物語』には、
山の神にめとられたり、山人にさ
らわれたりして山隠れした女が山
姥になった話が伝えられている。

また、山岳信仰の習俗の名残で、出
産に際して女性が入山する風習が
あったり、村落の祭りの際に選ば
れた女性が山にこもったりするこ
ともあった。こうした女性たちの
印象と、山人への畏怖、山の神への
信仰心とが相まって、妖怪化した
山姥が形成されていったと考えら
れる。

さらに、山姥は、産霊神的特質

をもつ。『山姥の反物』は、身ごも
った山姥の出産を手伝い褒美をも
らう。飯田市上村には、7万8千の
子を産んだ山姥の伝説が残る。足
柄山の金太郎は、山姥が夢の中に
現れた赤竜と通じて産まれた子だ
とされ、大町市八坂の金太郎伝説
では、大姥（山姥）と八面大王の子
と伝えられ、金熊温泉などの地名
を残す。青木村田沢温泉の有乳湯
も、山姥が坂田金時（金太郎）を産
むにあたり浸かったとされる。



喜多川歌麿
「山姥と金太郎」

産霊神的特質は、神話にも通
じる。神話に登場する神々は、往々
にして多産だ。また、黄泉国でイザ
ナミに出会い、逃げ帰る際にイザ
ナギが追っ手に投げつけて難を逃
れた髪飾り（葡萄の実、櫛（筍）、
桃の実の展開は、そのまま『三枚の
お札』のベースになっている。

時代的変遷の中で、山姥と鬼女
が入れ替わって語られている民話
も散見されるが、本質的な違いを
見定めておく必要がある。千曲川
左岸の塩田平に山姥話が見当たら
ない理由も探ってみよう。（弘）

ふるさとの 岩鼻の唐猫さま

— 軻良根古神社と訪ねて —

半過の岩鼻に開いた大きな穴。昔むかし人々を苦しめた大鼠と一族の鼠が、唐猫に追い詰められて何とか逃れようとかじつて開けた穴だと伝わる。満々とたたえられた湖の水は、鼠に食い破られて一気に押し流され、千曲川になつて流れ下った。大鼠たちも唐猫も、いっしょに流された。鼠が流れ



半過の岩鼻 着いた場所が坂城町の「鼠宿」、唐猫が流れ着いた場所が篠ノ井塩崎の「軻良根古神社」だという。

岩鼻から北へ 20 km、軻良根古神社を訪ねた。かつては矢代の渡しがあった場所。千曲川が大きく右に湾曲した突端に位置し、力尽きた唐猫が打ち上げられた場所というのも頷ける。神社の名称に「軻良根古」の文字が使われるようになったのは、明治 11 年から。カラネコを「韓根子」とし、渡来系氏族とのかかわりを説く説もあるというが、詳細は不

明だ。鳥居をくぐり、斜め右に曲がる参道を進むと拝殿がある。拝殿の額下に、「大己貴神（オオナムチノカミ）」「建御名方命（タケミナカタノミコト）」「菅田別尊（ホンダワケノミコト）」の 3 体の祭神の札が掛けられている。大己貴は大国主の別名。3 神が祀られることになった謂れを示すような説明書きは境内の中に見当たらない。境内北側には、横一列に石造りの撰社が並ぶ。その



軻良根古神社

今年こそ開催 「民話語りっこ・学びっこ」 10月29日(土)

一年前、「くらふち通信」第 22 便に、新企画「民話語りっこ・学びっこ」の開催計画を掲載しました。しかし、コロナ感染が広がる中、やむなく中止の決断をしました。「今年こそは」の思いを込め、コロナ禍ではあっても、余程のことがない限り開催する予定です。ただし、コロナ禍でもあることから、今回は下記のとおり半日開催と

し、講演会、語り発表会、交流会を予定しています。講演は、今年卒寿を迎えた稲垣勇一所长。語りは、発表会の時間が限られるため語り手を広く募る形は取りませんが、出演希望がありましたら事務局にお問い合わせください。コロナ対策を万全にしてお待ちいたします。大勢お越しいただき

会場	塩田公民館
日程	
講演会	13:00
語り発表会	14:30
交流会	16:00
終了	17:00

ますようお願いいたします。

産川

「この話がいいねと君が言ったから 六月十日は ふるやのもり記念日」という次第で、梅雨期に「ふるやのもり」の語りを三方所で話した▼保育園では難しいと思ったので、昔の家は藁で屋根を葺き、古くなるポタポタ雨漏りがするといふ前置きをして話した▼話し終わって年中組さんは、「夜、目がピカピカ光る動物見たことあるよ。猫、狸、狐の目が光るんだよ」と各々が、ボクも、私も見たと盛り上がった。彼等にとつて、最も心に残ったのは、そこだったようだ▼年長組さんは、前置きの話に「草の屋根だ」「傘はなかったの」「合羽はなかったの」「どんな服着てたの」と質問攻め。藁の話はしたが後は自分で考えてと、やっとな話に入る▼語り終えて、担任の若い保育士さんが『ふるやのもり』って、古い家の雨漏りの話だったんですね。小さいときこの話聞いたのに、今やつとわかりました。子ども達に絵本で読んでみます」と言ってくれた。心の中に種が残っていてくれればいい。それでいい。(美和子)

なかに、「養蚕社」と刻まれた撰社を見つけた。養蚕の敵、鼠を追い払う猫は崇められたに違いないと想像する。(ひろ)

民話とわたし II — 「教訓」の奥に —

塩田平民話研究所友の会員 加藤 道子

民話とほぼ関わりがなかった私が思う民話の印象とは、教訓です。「これをしちやあいけねえ」「これをするちや当たるぞ」「嘘を付いちゃならねえ」などなど。お話の起から結末にかけて、それらのことがわかりやすく語られ、仲間と力を合わせる大切さや、真つ当に生きることを教えてくれる…そんな印象です。

けれど、ここ2ヶ月ほど、友の会々員になり、民話についてのお話を聞かせていただいていると、「教訓」の奥（何かモヤモヤとして、うまく言えませんが…）に民話は、長い年月をかけて続く、信仰心、自然との関わり、抗えない業を生きる人の姿、動物、植物、全ての命に密接に関わって語られているのではないかと、思い始めました。そして、その一部に自分も今、いるのではないかと思ったりしています。そんな思いを抱きながら、これからも学んでいこうと思っています。

久しぶりの素直な時間

みすず台南 佐藤 園子

先日、みすず台南の「健康広場」で、民話を聞く機会がありました。今日はどんな話が始まるのか、気持ち落ち着かせて待ちました。お話をされる方は二人。一斉に静かになりました。

「国分寺の鐘」

昔、昔のお話です。ある人が、八日堂の鐘を持ち帰

るといいます。あの重い鐘をかっついで千曲川を渡り、小牧山を登り、やっと須川の湖沼に着きました。一息して鐘を見ると、鐘は湖沼の水の中。人々は長い間鐘のことは忘れ、湖沼に吹く風を楽しんでいました。そんなとき、どこからか、そよ風のように「ゴーン」という鐘のよな音が聞こえました。人々は、今

事務局だより

塩田平民話研究所総会

4月27日（水）に行いました。

昔ばなし語りの会

本年度の今後の予定は、左記のとおりです。

- 上田創造館 8月28日（日）
- 2022年1月29日（日）
- とつこ館 3月26日（日）

日も「八日堂の鐘」は私たちを見守っていてくださると、心したものです。

私たちの住む西方前方には、小牧の山が横たわっています。家から出たとき、毎回見るのが楽しくなりました。

お話はこのほかに三話。皆と夢のような時を共有できて幸せでした。



（筆者の佐藤さんは、鐘が今も須川湖に沈んでいるのか気になり、国分寺のお大黒様に聞きに行かれたそうです。「池ざらいしてみないとわかりませんね」というお答え。想いを繋いでいただきました。）

編集後記

今回も、コロナの感染拡大に触れざるを得ない。第7波の急拡大が止まらない。「過去最多」の文字が躍る。政府からは、全数確認しない方針が打ち出された。打つ手が無い、お手上げ状態、コロナ様の気の向くままにと言っているようなもの。そもそも、7波にも及ぶこの3年、有効な手立ては打たれてきたのか▼某保守政党の改憲草案と、旧統一教会のそれとが酷似していること知った。庶民の生活を顧みず、洗脳し、超高額な寄附を巻き上げる手法と目的は、反社団体も政権も同じ穴の貉か。身銭を切った税金が軍事費倍増に使われたのではたまらない▼人の声がAIに乗っ取られている。カーナビも、駅構内のアナウンスも、新幹線の車内放送も、ついには村の有線放送まで。「時代はAI、人件費が抑えられる」と理事者。効率、スピード、スマートが是とされる時代。その裏で、忘れてはならないものが忘れ去られ、見るべきものが見えなくなされていらないか。歩いていけばこそ見える野の花を、新幹線から見ることできない。まして、リニアなど。人の声のアナウンスに哀愁を誘われる人の数は減るばかり。「民話」は、その流れにささやかな抵抗を続けている。（弘）